

IT を若干活用した中国語授業の試み

笹 倉 一 広

0. はじめに

最近のパソコンやインターネット、ブロードバンド接続の普及にともない、その技術は中国語教育にも応用されてきている。インターネット上には本格的な CALL システムでの事例や、ドリルプログラムが華々しく紹介されている。日本中国語 CAI 研究会という学術団体もある。こういったいわゆる IT (Information Technology) を日頃の語学教育に使えないか、と思う大学語学教員も多いだろう。しかし、一方、専門的 IT 技術を習得し、プログラムが組めるような大学語学教員は多くはないし、CALL システムがどの大学にもあるわけでもない。一橋大学にもない。筆者自身、パソコンは人並み程度には使えると思うが、プログラムを組めるわけでもない。それでも、少しは授業に IT を応用してみようと、昨年度 (2002 年度) 今年度 (2003 年度) と若干の試みをしてきた。表題に「若干」と付した所以である。その紹介と共に、問題点の提起と筆者の管見、及び一橋大学での現状を明らかにしたい。

1. 科目・クラスの概要

一橋大学では、いわゆる第 2 外国語は、1 年次に週 2 コマ 4 単位が必修であり、「クラス〇〇語」と呼ばれている。2 年次以降は数理科目と併せての選択必修となり、2 年次に履修しないことも可能である。本論で扱う授業は、この「クラス中国語」で、まったく中国語を知らない 1 年生に 1 年間で中国語の初級段階を教授するものである。

授業数は、週 2 コマ (1 コマ 90 分) × 通年 28 週 (夏・冬学期各 14 週 期末考査は別) = 56 コマが原則である。02 年度は学内行事による休講措置の他、筆者は頻繁に開かれる学外委員会に出席のため、やむをえず 7 回休講せざるをえず、実際に授業をしたのは 46 回であった。

02 年度のクラスは学生数 42 名。内訳は商学部 16 名・経済学部 11 名・法学部 6

名・社会学部 9 名，男女比約 7：3。「クラス中国語」は再履修クラスを別途設けているので，再履修生はいない。平均欠席回数は，他大学受験など特殊事情のあった学生 2 名を除いて，1.6 回（4％）であった。また，落第した学生は，長期欠席をした者を除き，幸いにしていなかった。

03 年度のクラスは学生数 42 名。内訳は商学部 14 名・経済学部 12 名・法学部 6 名・社会学部 10 名，男女比約 8：2。02 年度同様再履修生はいない。

2. IT 環境

2-1. 教室の設備

一橋大学では，語学の授業に使われる一般の教室には，AV 設備は普通ない。テーブルや CD を使いたければ，教師自身がテープレコーダや CD プレーヤを持参しなければならないし，ビデオを使いたければ，各階の倉庫から 2，3 人がかりでディスプレイ・デッキのラックを教室に運び込まなければならない。授業が終わればまた 2，3 人がかりでしまわなければならない。他大学に比べて著しく劣悪である。

本稿の授業では，02 年度は LL 教室と AV 教室を利用し，03 年度は LL 教室のみを利用した。両教室とも，教材提示装置・VTR・DVD・CD・VCD が使用可能で，AV 教室ではスクリーンに，LL 教室では大型ディスプレイ及び各ブースのディスプレイに出力することができるからである。

さらに，本稿の試みでは，教師の持ち込んだノートパソコンの画像を提示できることが重要である。AV 教室ではコンソールにケーブルで繋ぐだけで可能である。ただし，プロジェクタの性能上，どうしても暗室化しなければならなかった点は不便であった。03 年度には新しいプロジェクタが導入され，暗室化しなくてもすむようになった。また，LL 教室では直接パソコンの画像出力を受け入れる機能がなかったので，パソコンの画像を一度ダウンコンバータを介し，テレビ信号に変え，ビデオの外部入力から取り込んで提示した。ダウンコンバータは筆者が自費で用意した。03 年度は設備が改修され，直接パソコンからプロジェクタでスクリーンに投影できるようになった。

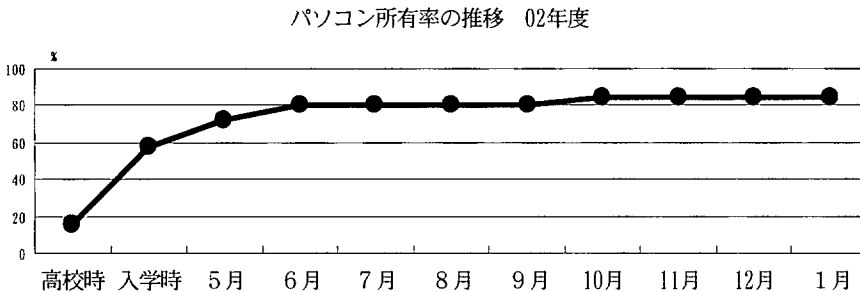
インターネット接続は AV 教室では可能だが，LL 教室には端末口は今でも設置されていない。授業で必要な場合は，筆者自身の携帯電話で接続するが，速度が遅い。

なお，各教室とも席は固定席とした。出欠の把握が迅速にできるし，小テストの転記・返却を効率的にできるメリットがある。

2-2. 学生のコンピュータ所有率

後述のSFC（＝慶応大学湘南藤沢キャンパス：IT を中心とした教育を展開していることで有名）の教科書に付属している便利なCD-ROM も、コンピュータがなければ使うことはできない。また、音が出るという制約上、大学の情報教育棟の開放端末で使うことは不可能である。自宅・下宿にコンピュータを所有している（必ずしも個人専用でなくてもよいが）ことが、どうしても必要である。

いったい、新入生のどの程度がコンピュータを所有しているのか。この02年度クラスでの調査結果を次に掲げる。



グラフから分かることは、高校時での所有率は意外に低く、大学入学時に購入する割合が高いことである。このことは、6月には8割の学生がパソコンを所有するものの、少なくとも夏学期はパソコンについてはまだ不慣れなビギナーであることを示唆する。1年を通して最後まで所有しなかった者は5名であった。

03年度の場合、最初の授業時（4/15）での所有率は71%で、02年度の同期（4/12）の50%より高かった。また、6/24時点での所有率は81%で02年度と同水準であった。

2-3. 所有パソコンのインターネット接続率（（ ）内はクラス全員に対する割合）

所有パソコンのインターネットへの接続率は

02年度（1/24） 92%（83%） 03年度（6/24） 68%（55%）

接続に占めるブロードバンド接続率は

02年度（1/24） 88%（73%） 03年度（6/24） 74%（41%）

調査時点は、02年度がほぼ学年末、03年度は夏学期半ばすぎである。調査年度が異なるが、1年のうちに接続率が高くなる様子が見て取れる。

2-4. 学生はどこでインターネットに繋いでいるか

Q. あなたは普段どこでインターネットを最も利用しますか？（03年度 6/24）

自宅・下宿 52% 情報教育棟端末 48%

自宅と大学が半々で拮抗している。上に述べたように03年度のブロードバンド接続率は41%なので、家で接続出来る者は家で、そうでない者は大学でということであろう。そのため、情報教育棟に対する不満も多い。学生の3大不満を挙げれば、場所が遠い・端末数が不足でいつも満員・開館時間が短い、であった。

教える教員は研究室の学内LAN接続で24時間おむね不自由なくインターネットを利用できる。しかし、1年生の夏学期、半分の学生は、遠く、混雑し、利用時間の限られる情報教育棟でインターネットに接続していることは考慮しなければならないことである。

2-5. パソコンを所有しない学生への対応

パソコンは安くなってきたとはいえ、高価な買い物であることは否めない。経済的事情でパソコンを購入できない者が不利で不平等ではないか、という向きの意見もあるだろう。事実03年度の学生から、「中国語学習にあたってインターネット環境が整っている人とそうでない人で公平を期すために一切パソコンは使わない方がよい。僕の家は貧乏なのでパソコンもADSLもない」という意見が寄せられた。

しかし、上記のグラフが示すように、8割以上の学生がパソコンを所有する状況で、これを語学教育にも活用しない手はないと考える。貧しくてもみな平等の毛沢東思想に甘んずるよりも、可能な者からより効率的で有効な方法で学習した方がよい。また、使用した教科書は、後述の02年度に使用したSFCの教科書でもパソコン無しで従前のおり学習できるもので、パソコン用CD-ROMによって得られる便宜はいわば $+\alpha$ の部分である。この点をよく説明して、要らぬ不平等感・劣等感を持たせないようにする必要がある。

「親を騙してもパソコンは早く買え」と筆者は毎年学生に勧めている。02年度学年末に学生に徴した後輩学生へのアドバイスの中でも、この授業のためだけではなく、早くパソコンを買うべきだというものが多く見られた。「この授業での必要性がなかったとしても、学生生活にパソコンは必要か？」という問いに対して、「絶対必要」と答えた割合は80%で、「なくてもかまわない」と答えた者は1名しかいなかった。もちろん、02年度の場合、パソコンを持たない学生に対しては音声教材をカセットやMDに録音するなどの便宜を図り、著しい不利益を被ることのないよう配慮した。

3. 授業の実際

3-1. 使用教科書

一橋のクラス中国語は7クラスあり、担当教員が各自自由に教科書を選ぶことができる。

02年度のクラスで使用したのは、『インテンシブ中国語』（氷上正・重松淳・田島英一編著 東方書店 2000年10月）である。この教科書は慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス中国語研究室で、SFCの授業用に編集されたものである。SFCは周知のとおり、教育・研究にITを積極的に活用している大学である。教科書は全20課（第1課は発音編）。日本人男子学生の二人連れが中国人女性ガイドと中国各地を旅行する筋書きになっている。各課はやや長めの課文と、文法解説および練習問題からなる。巻末には単語索引を付す。以上の点だけを見るならば、一般的な初級向け教科書と何ら変わるところはない。当然、従来の教科書と同様な方法で授業を行うこともできる。

この教科書の特徴は、その付属のCD-ROMにある。しかし、音声教材を従来のカセットテープから音楽用CD-ROMの形にただけの、今日では一般的となったタイプものではない。コンピュータで使用するプログラム及びデータが収められたもので、その内容は、《課文》（＝テキスト本文）《新出単語》《語法解説》《全課単語》《スキット》《ヒアリング練習》から成る。

《課文》はいわゆる課文の音声教材だが、コンピュータ・データとして扱われているので（PDFファイルに音声を貼り付けたもの、以下本稿では「音の出るテキスト」と呼ぶ。）、一般の音楽CD-ROM教材ではできない次のようなことができる。

- ① 課文を、漢字だけ・ピンインだけ・双方併記の3種類でディスプレイできる。
- ② センテンスをクリックすることで、そのセンテンスだけを何度でも聴ける。
- ③ 課文会話文の任意のパートでロールプレイング練習ができる。

《新出単語》および《全課単語》は、中国語漢字・ピンイン・訳語を対照した単語リストであるが、各単語をクリックすることで、その単語の発音だけを何度でも聴ける。

《語法解説》は大変詳細なもので、全ページをプリントアウトするとA4版で500頁あまりになり、優に1冊の文法書を凌駕する量がある。

《スキット》は、その課の重要センテンスを応用したユーモアに富む短い会話で、台本がディスプレイされるだけでなく、動画で見ることができる。演じているのはSFCの学生であり、同年代が演じていることで親近感を得、実際に使うことに抵抗感

を減らす効果が期待できよう。

《ヒアリング練習》は、各課の復習的なものと応用練習用に一段レベルを高くしたものを用意されている。ひとまとまりの文章を朗読したあと、設問を聞き、それに対する4つの解答を聴き、正解を選ぶ形式である。各課題文に対し、設問は5題ある。本文・質問・解答ともに文字はディスプレイされない。間違えた場合は、問題に再度挑戦するようプログラムされている。注目すべきは、再挑戦の場合、選択肢の順序がランダムに変わること、コンピュータならではの技術である。

その他、SFC 中国語研究室のサイトには関係した副教材が用意され、自由にアクセス使用することができる。

03年度には、『1年生の頃』(相原茂・陳淑梅・飯田敦子著 朝日出版社 2000年4月)を使用した。前年度のSFCの教科書をやめた理由は、残念ながら、授業時間のたっぷり(クラス定員30人 100分を週4コマ)とってあるSFCのカリキュラムに合わせた教科書は課文が長く、また単語も多く高度で、一橋の条件では消化しづらかったためである。

3-2. 授業のホームページ

本授業では専用にホームページを開設し、授業の予定や各種リンク、教材などを提供している。掲示板もあり、クラスの情報交換の場として学生に使われている。しかし本来期待していた授業内容に関する質問は02年度の場合、数例しかなかった。

毎回行う小テストは即日採点し、講評をその日のうちにアップするように努めている。毎回満点者は名を挙げて表彰し、不振者にはメールで奮起を促している。

学生の利用の多いのは、小テストの講評、掲示板、授業予定などである。

なお、このホームページはクラス内部向けなので、パスワードを掛けてある。



3-3. 02 年度の授業

第1回に中国語の全体像および大学での学習についてガイダンスを行ない、2回～5回を発音に充て、連休明けの6回目に一人ずつ発音試験を行った。以後、2回で1課の進度を原則に授業を行った。試験については、夏学期の期末試験は、夏休み明け冬学期の最初の授業で行った。学年末には筆記試験と発音の試験（文章。出来る者は暗唱）を課した。他に夏学期末にペアを組んでのオリジナル寸劇の上演を課した。冬学期末にも予定していたが、休講が多かった関係で実施できなかった。

毎回の授業は、前回範囲の小テスト、発音トレーニング（夏学期のみ）、単語の解説、本文の音読練習、語法解説、練習問題などで、ことさらにパソコンを授業に取り入れたものではない。もちろん、音読練習やヒアリングの練習には付属のCD-ROMを活用した。

授業で有効利用したものに他にVTRがある。周知のように人間の集中力は15分程度しか続かない。授業にメリハリをつけ、気分転換を図る意味でも、短い数分のVTRを見せることは効果があったと思う。教材としては今まで撮り貯めしてあるNHK テレビ中国語会話のスキットや文化紹介、CCTV のコマーシャルなどである。学生はかなりの興味を持って見てくれる。話はややそれるが、課文がVTRで付属する教科書もあるので、普通教室にも最低VTRの設備が備え付けられるよう願って止まない。

3-4. 学生のパソコン利用した自習率の推移（02 年度）

前項で述べたような授業内容であるから、学生のパソコンの利用は自習が主となる。筆者は学生に次のことを要望した。

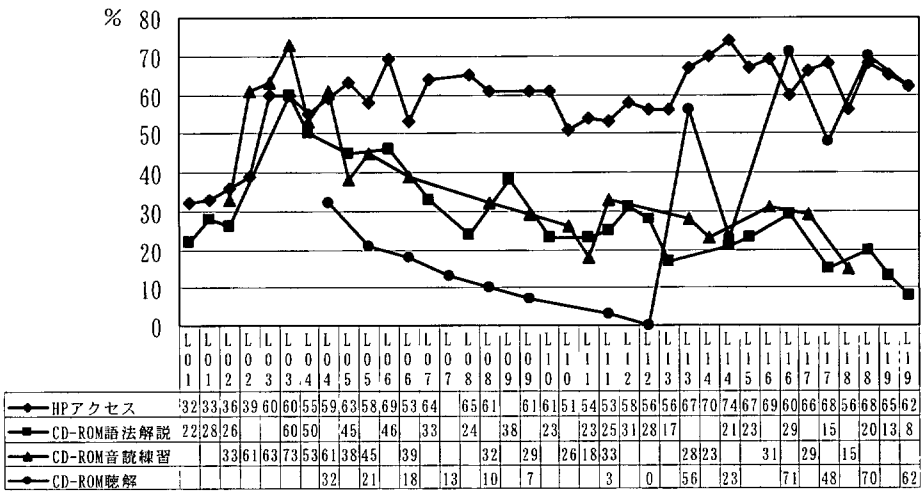
- ① ホームページに毎回アクセスすること。
- ② CD-ROM の語法解説を読むこと。
- ③ CD-ROM を使い、課文の発音練習をすること。
- ④ CD-ROM のヒアリング練習をすること。

以上の点について、小テストの余白でアンケートを取り、集計した結果が次頁のグラフである。

単色刷りのため見づらく、またアンケートが不備でデータを取らなかった箇所が多々あるが、おおよその傾向はご覧頂けると思う。次のような特徴があげられよう。

- ① ホームページへのアクセスは60～70%で横ばい。
- ② 語法解説・音読練習は右下がり。課が進むにつれて、自習率が悪くなる。

学生のCD-ROMを使用した自習率の推移



③ 最も骨の折れる聴解練習は自習率がより低く、一時は0%になる。しかし、その後急に高くなった。

①の結果は、②③と異なり、情報を得るためで、かつ積極的な努力は不必要なので高い水準で横ばいなのも当然だろう。他については、CD-ROMを使って自習しろと口うるさくいい、毎回アンケートを取るという状況下で上記のような結果である。単にパソコンで使える教材といった興味からだけでは、学生の自習意欲は引き出せないようだ。一通り発音も分かるようになり、文法事項も甚解を求めなければ最低限は教科書の解説と授業の解説で事足りるからだろう。③で自習率が急上昇したのは、あまりの自習率の低さの対策として、聴解の問題を小テストに出題するようにしたためである。教科書付属のCD-ROMは封も開けられないことがないと言われるが、努力が目に見え直接フィードバックする工夫を講じて、使用を促す必要がある。語法解説・音読練習も、自習した努力が成績に反映するような工夫をする必要があったと反省している。

では、CD-ROM教材について学生は無用の長物と考えているのだろうか。そうでもないようだ。学年末のアンケートでは、「役立った」とする者が圧倒的で、「役立たなかった」とする者は3名に過ぎなかった。具体的に役立った点として、単語リストで単語の発音が聞ける点を挙げる者が最も多く、次いで聴解練習が挙げられた。

3-5. 学生のパソコンのスキル

03年度は02年度の教科書をやめ、通常タイプの教科書にした。(ただし、本文スキットのVTRがあり、教師は授業で使うことが出来る。教科書には音声の音楽CD-ROMが付属。) 前述のSFCの教科書のような「音の出るテキスト」を、筆者自らPDFファイルで作製し、ホームページからダウンロードして利用できるようにした。授業中にも実演し、その便利さをアピールしたのだが、夏学期終了時点になっても、利用者は4,5名の10%程度にとどまり、02年とは大きく異なった。03年度クラスのパソコン所有率(6/24現在)は80%であり、昨年と同程度である。「音の出るテキスト」を使えたらいいと思っている学生の割合は調査すると65%と低い数字ではない。昨年と今年のと違いは、CD-ROMで供給されているか、自分でダウンロードしなければならないかの違いである。

「音の出るテキスト」を使うには、それだけではなく、PDFを読むためのソフトAcrobat readerをまずweb上から、ダウンロード、インストールし環境を整えなければならない。02年度の場合はCD-ROMから簡単にインストールできた。また、インストール手順などについても、CD-ROMの場合は教科書に印刷・解説されているのに対して、インストール手順もweb上で参照しなければならない。つまりは、ある程度のパソコンスキルが必要なのである。

そこで、学生のパソコンのスキルについて調べたところ、次のような結果が得られた。

	03年度	4/15	6/24
①ワープロソフトで日本語の文章が書ける	52%	88%	
②表計算ソフトで簡単な集計が出来る	14%	28%	
③インターネットを閲覧できる	81%	90%	
④インターネットでソフトをダウンロードして利用できる	21%	28%	
⑤ホームページを作成して公開している or 出来る	0%	7%	

各技量とも約2ヶ月の間にアップしている。これは大学入学を期にパソコンを所有することと密接に関係があるだろう。しかし、④のインターネットからのダウンロードの増加率が低い。この点に問題があるのではないかと考え、さらに細かい質問を行った。

web からファイルをダウンロードしたことがあるか？ (03 年度 7/1)

ある 50% 仕方が分からないのでない 35%

必要がなかったものでない 25%

PDF ファイルを開いたことがあるか？

ある 25% うまく開けなかった 2%

PDF ファイルって何？ 73%

開く側の環境に左右されないファイル形式としてかなり普及している PDF ファイルも、本学の新入生には馴染みが薄いらしい。

もうひとつ「音のでるテキスト」が使われない理由として、そのファイルサイズが大きいことが考えられる。PDF ファイル・WAV ファイルをまとめて自己解凍形式に圧縮し、1 課文で約 12M ある。ブロードバンド接続でないとダウンロードはできないだろう。今年のクラスのブロードバンド接続率は 40% である。大学の情報教育棟の開放された端末でダウンロードをすることもできるが、12M のファイルはフロッピーには収まらない。クラスの 87% の学生は情報教育棟の開放端末を使用したことがあるが、CD-RW に保存出来ることを知っている者はその 3 人に 1 人にしか過ぎない。

また、このように巨大なファイル自体にも不慣れだと思われる。フロッピー 1 枚、CD-ROM 1 枚の容量をほぼ正確に答えられたのは 25% 程度にすぎず、たいていは「わからない」という回答であった。

以上のように折角の「音の出るテキスト」も web で供給では手間とスキルが必要なので、利用されないと結論づけられよう。年度当初に CD-ROM の形で供給するべきであった。

4. 教員の時間的負担

上記授業を遂行する上で、どれぐらいの負担がかかるか。各教員の能力にもよるが、筆者の場合だと、1 回の授業につき、小テストの採点、およびいわゆる闇魔帳への転記、小テストの講評作成・アップロード、その他ホームページのメンテナンス、小テスト不振者へのメール、次回授業の教案作成、VTR 等の教材準備など合わせて 4~5 時間必要である。これとは別に、03 年度の「音の出るテキスト」作成には 1 課あたり 2 時間必要である。正直なところ負担に感じる。学生の予習復習時間より余程多い。

小テストは IT とは無縁の従来型の教育手段で、この毎回の小テストを略せばかな

り負担は軽減出来る。しかし、教育上効果があり、学生の出席を維持する機能も果たしていると思う。学生たちはなんだかんだいっていても、学年末の授業評価では小テストの意義を評価してくれていた。廃することはできない。小テストの講評のアップロードはIT活用によって増えた負担である。従来であつたら、次の講義で答案返却時に口頭で述べれば済むことを時間をかけて文章にしなければならない。

このようにITの活用は現在のところ、時間的負担を教員に強いるものである。

5. おわりに

以上の考察から次のことが結論づけられよう。

- ① 一橋大学ではIT活用語学教育が行えるような環境は未整備である。
- ② 新入生は入学時に多くパソコンを購入するものの、使うことには初心者で、教える側が期待するほどの技量を備えていない。
- ③ ITの活用は教員に時間的負担が大きい。

①については、いずれ改善されると信じている。如水会の援助など望みたい。

②については、平成15年度から高校の指導要領が変わり、「情報」が必修科目となった。これにより、平成19年度以降の新入生には改善が期待できるだろう。それまで新入生に対してはいたれりつくせりの対応をしてやらなければならない。

③については世の中のIT環境の整備にともない、各種の教材などが売り出され、教材開発の面での教員負担は軽減されると思う。一方、IT環境の整備は、箇々の教員に使いこなす技術の習得と情報の発信を強いるようになると思う。医師がMRIなど高度医療機器に対応して医療技術を研鑽するのと同様に、大学の語学教員もITという新しい教育手段を使いこなせるように技量を磨かなければいけないのである。